

Title	英語の米英差の起源と発達 : color/colour問題再訪
Sub Title	The origin and development of American and British English : color vs. colour revisited
Author	堀田, 隆一 (Hotta, Ryūichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.50- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0050">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0050</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 英語の米英差の起源と発達 — *color/colour* 問題再訪<sup>1</sup>

堀田 隆一

## 1 序論

英語の米英差の問題は英語史において常に研究されてきた主要なテーマである。言語学的な観点から音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論など、そして社会言語学的な観点から地域方言、社会方言などのあらゆる側面からアプローチされてきた。本稿で取り上げる正書法の側面においても、多くの研究の蓄積がある。ひとえに綴字の米英差といっても、関係する単語を一覧してみると、主要なものだけでも100語は優に超える。

よく知られたものとして *analyze/analyse*, *center/centre*, *defense/defence*, *distill/distil*, *judgment/judgement* などがすぐに想起される。とりわけ著名なのは *or/lour* の対立だろう。関連する語のうち比較的よく用いられるものに限っても、以下のようによくを挙げることができる。

*arbo(u)r*, *ardo(u)r*, *armo(u)r*, *armo(u)r(er)*, *armo(u)ry*, *behavio(u)r*, *cando(u)r*,  
*clamo(u)r*, *clango(u)r*, *colo(u)r*, *demeano(u)r*, *dolo(u)r*, *enamo(u)r*,  
*endeavo(u)r*, *favo(u)r*, *favo(u)rite*, *favo(u)ritism*, *fervo(u)r*, *flavo(u)r*, *harbo(u)r*,  
*hono(u)r*, *hono(u)rable*, *humo(u)r*, *labo(u)r*, *misdemeano(u)r*, *neighbo(u)r*,  
*neighbo(u)rhood*, *odo(u)r*, *parlo(u)r*, *ranco(u)r*, *rigo(u)r*, *rumo(u)r*, *savo(u)r*,  
*savo(u)ry*, *splendo(u)r*, *succo(u)r*, *tumo(u)r*, *valo(u)r*, *vapo(u)r*, *vigo(u)r*

本稿では、このリストのなかで最も高頻度の語とってよい *colo(u)r* に焦点を

当てる。アメリカ式 *color* とイギリス式 *colour* の対立について、一般には他の綴字の米英差の例とともに、Noah Webster の影響が大きいと説明される。しかし、Webster より前の時代にまで遡って両綴字の揺れの歴史をひもとくと、各時代に *or* と *our* の揺れをめぐる複雑かつ興味深い事情が展開してきたことに気づく。この問題には、たかだか200年では済まない、700年以上の歴史が隠されているのである。以下の節で、その歴史の概略を描いていく。

なお、本稿では語形は大文字で COLOR のように表記し、綴字は斜体で *color*, *colour* のように表記する。

## 2 現代英語期の分布

米英変種での *color* と *colour* の分布について、まず現状を確認しておこう。現代アメリカ英語の代表的コーパス COCA と、イギリス英語の BNCweb を用いて調査した結果を示す。理想的には COLOR の屈折形、派生語、複合語を含めて網羅的に検索すべきだが、今回は簡易的にレンマ検索を利用して、COLOR, COLORS, COLORED (以上は屈折形として)、COLORFUL, COLORLESS, DISCOLOR の6種類の語形を取り出すにとどめた。

COCA を用いたアメリカ英語の調査によれば、アメリカ式の *or* が、予想通りに圧倒的な95%前後の比率で用いられている。しかし、逆にいえば、5%ほどではイギリス式とされる *our* が用いられている。この事実は、イギリス英語の状況と比較すると興味深い。

BNCweb を用いたイギリス英語の調査結果をみみると、99%ほどというほぼ完全な比率でイギリス式の *our* が用いられている。アメリカ綴字が用いられてい

表1: COCA による *color* と *colour* の頻度

語形	<i>or</i>	<i>our</i>	<i>or</i> 比率
COLOR	124,778	4,792	0.9630
COLORS	33,225	1,886	0.9463
COLORED	5,553	179	0.9688
COLORFUL	10,871	412	0.9635
COLORLESS	1,000	57	0.9461
DISCOLOR	110	0	1.0000

表2: BNCweb による color と colour の頻度

語形	or	our	our 比率
COLOR	115	11,332	0.9900
COLORS	24	4,396	0.9946
COLORED	14	2,432	0.9943
COLORFUL	6	1,093	0.9945
COLORLESS	4	166	0.9765
DISCOLOR	1	19	0.9500

る少数の例を確認してみると、引用符に囲まれた短いタイトルらしきもの（アメリカ系由来の可能性のあるもの）のなかに現われるものが散見され、それを差し引いて考えることが許されるのであれば、our 比率はさらに100%に近づくだろう。この点では、イギリス英語のほうが綴字慣習について一貫しており、アメリカ英語はむしろ若干の寛容さを示すとみることもできる。

次に、米英変種の比較にとどまらず、世界の英語諸変種における color と colour の分布の現状を簡単にみておきたい。この目的には、GloWbE が最適である。このコーパスは20カ国からの英語変種を総合した19億語からなる巨大コーパスで、変種間の比較が容易に行なえる仕様となっている。その調査結果を掲げる。まずアメリカ式 color に関するグラフを、次にイギリス式 colour に関するグラフを示そう。

横方向の中央辺りに歴史的にはイギリス式が多いと予想される東南アジアの

図1: GloWbE による color の地域別分布

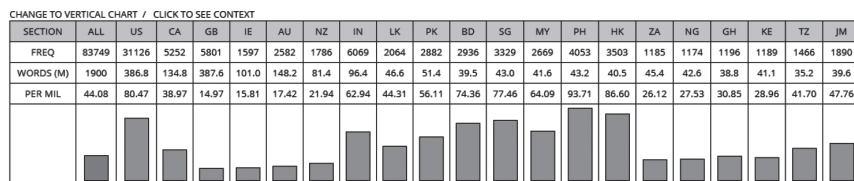
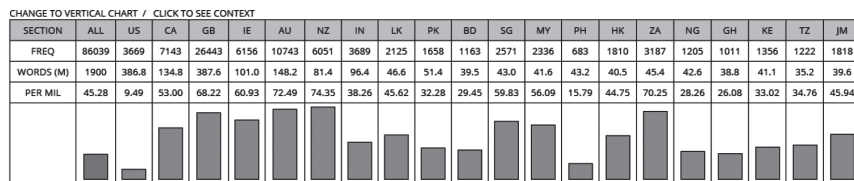


図2: GloWbE による colour の地域別分布



国々が集まっているが、実はアメリカ式綴字のほうが優勢のようだ。近年の英語のアメリカ化の影響が疑われる。一方、グラフの左側には（米国を除く）アングロサクソン系諸国が集まっており、そこでは予想通りにイギリス式が優勢である。右側に集まっているアフリカ諸国では、両綴字の差はさほど大きくない。*color/colour*の対立を単に米英間の問題として論じる時代は過ぎ去りつつあるようだ。

### 3 *color/colour* の揺れの起源

現状の分布を確認したところで、歴史を振り返っていく。*color/colour* の揺れの起源から説き起こし、中英語期における分布、そしてアメリカ英語を含む近代英語期における分布を概観しよう。

現代のアメリカ式 *color* に対してイギリス式 *colour* の綴字上の対立は広く知られているものの、その起源に関して、当該語が英語に現われた当初から「綴字の揺れ」として確認されるという事実はほとんど知られていない。

この語は、ラテン語で「色」を意味する名詞 *color(em)* に由来する。このラテン単語が直接に、あるいは古フランス語を経由して1300年頃に英語に借用された。英語で *or* と *our* の間で揺れを示す多くの語がラテン語由来だが、それらのラテン語における綴字は、同言語の厳格な正書法に従って *or* となるのが原則だった。*colorem, ardorem, dolorem, favorem, flavorem, honorem, humorem, laborem, rumorem, vigorem* のごとくである。

古フランス語では、これらのラテン語の *or* が受け継がれるとともに、*our* その他の異綴字も現われ、併用状況が生じた。そして、この古フランス語における併用状況が中英語期にもそのまま持ち込まれることになった。実際、中英語では *or* と *our* の両綴字が確認される。つまり、現代の *or/our* 対立につながる綴字の揺れは、英語というよりも古フランス語において、まず生み出されたのである。

### 4 中英語期の分布

*OED* の *colour | color, n.1* によると、この語は名詞として中英語期の半ばである1300年頃に以下のように初出する。

*c1300 St. Patrick's Purgatory* (Laud) l. 562 in C. Horstmann *Early S.-Eng. Legendary* (1887) 216 He..axede him of zwuch colour were heuene op-riht pere.

*colour* という綴字がみえるが、これは英語における最初期の綴字の典型的なものの1つである。この語はラテン語 *color* から直接、あるいはフランス語 *color* を経由して借り入れられたものとされ、少なくとも上記の最初例の綴字は、古フランス語経由のルートを示唆するようにみえるが、事はそれほど単純ではない。古フランス語における綴字も諸変種間で様々で、*OED* の語源欄によれば、次のように異綴字の種類はきわめて豊富だ。

Anglo-Norman *colour, culur, coler, colore, coleure, collour*, Anglo-Norman and Old French, Middle French *color, colour, coulour*, Old French *color*, Old French, Middle French, *couleur, couleur*, Middle French *colleur, coullour*, etc.

フランス語側ではこのような綴字の多様性がみられたが、英語側でも多様性に關してはまったく負けていない。*OED* より異綴字のリストを掲げよう。

ME *coleour*, ME *coleure*, ME *colewre*, ME *colovre*, ME *coulur*, ME *culur*, ME *kolour*, ME-15 *collore*, ME-15 *colowr*, ME-15 *colowre*, ME-15 *coloure*, ME-16 *coler*, ME-16 *coleur*, ME-16 *colore*, ME-16 *coloure*, ME-16 *culur*, ME-16 *colure*, ME-16 *cullour*, ME-16 *culour*, ME- *color* (now U.S.), ME-*colour*, IME *clour*, IME (in a late copy) 15-16 *collor*, 15 *colloure*, 15 *collyr*, 15 *cooler*, 15 *cooller*, 15 *coollor*, 15 *coollour*, 15 *coollur*, 15 *collore*, 15 *coloure*, 15 *collar*, 15 *couloure*, 15 *collore*, 15 *cowler*, 15-16 *coller*, 15-16 *color*, 15-16 *colour*, 15-16 *coler*, 15-16 *cullour*, 15-16 *culour*, 15-16 *couloure*, 15-16 *culler*, 15-16 *cullor*, 15-16 *culloure*, 15-17 *collour*, 15-17 *couller*, 15-17 *coullor*, 15-17 *coulour*; Scottish pre-17 *coiller*, pre-17 *coller*, pre-17 *colleur*, pre-17 *collor*, pre-17 *collour*, pre-17 *colloure*, pre-17 *collore*, pre-17 *coloure*, pre-17 *colowr*, pre-17 *colowre*, pre-17 *culur*, pre-17 *culer*, pre-17 *couller*, pre-

17 **coullour**, pre-17 **coulour**, pre-17 **culler**, pre-17 **cullor**, pre-17 **cullour**, pre-17 **culloure**, pre-17 **culour**, pre-17 17-18 **color**, pre-17 17- **colour**.

中英語での出現形に注目すると、*MED* の *colour* の見出しのもとでは、代表的な異綴字として *colour* のほか *culur*, *colur*, *coler* が挙げられている。また、初期中英語期のテキストを収録する *LAEME* によれば、最初期の例として、13世紀後半 (*OED* の初出年代より若干早い) からの *culur*, *colur*, また14世紀前半からの *colurs*, *colour*, *colures* の計5種類が得られた。取り出すことのできた例が少ないことから、これらの綴字の揺れが、初期中英語期のなかでの時期区分や方言区分と関係があるか否かを判断することは難しい。

一方、後期中英語期にかけては、分布としては *or* よりも *our* が好まれるようになったことが、Chaucer からの例により示唆される (Anson 37-38)。これは借用されてから比較的年代の浅い段階では、英語でもフランス語にならって強勢が第2音節に落ちるのが普通であり、強勢をもつ長母音であることを示すのに *or* よりも視覚的に長さの感じられる *our* のほうが好まれたからと考えられる。そして、後に強勢が第1音節に移ってからも、(イギリス) 英語では、フランス語的な発音を映し出す *-our* が主たる綴字として保持され、ますます優勢となっていった。ただし、*or* も十分に存在感のあるライバルとして、後々まで存続したことは銘記しておきたい。

上記のように事情は複雑だが、確実に言えることは、この語が英語に出現した最初期より、すでに第2音節の母音を1つの母音字で綴るか、2つの母音字で綴るかという変異——現代の *color/colour* 問題の元祖——が確認されるということだ。英語におけるこの問題の淵源はやはり「ラテン語綴字 vs フランス語綴字」に、もしくは「フランス語の1つの綴字 vs フランス語の別の綴字」にあるといっていよい。

## 5 近代英語期の分布

近代英語期については、まず英米語テキストを取めたオンラインコーパス *ARCHER* を用いて *color/colour* の分布を調査した<sup>2</sup>。同コーパスにアクセスし、検索欄に “color\*” および “colour\*” と入力し、それぞれの結果を取り出し、そこから4つの図表を作成した。この図表により、両綴字の米英差について、1600–1999年を8区分した時代別に、そして12のジャンル別に比較することが可能となる。以下の

図中に用いる時代区分とジャンルの略号は以下の通りである。

- P1 = 1600–49, P2 = 1650–99, P3 = 1700–49, P4 = 1750–99,  
P5 = 1800–49, P6 = 1850–99, P7 = 1900–49, P8 = 1950–99
- a = advertising, d = drama, f = fiction, h = sermons, j = journals, l = legal,  
m = medicine, n = news, p = early prose, s = science, x = letters, y = diaries

では、イギリス英語からみていこう。図3がアメリカ式 *color* の数値を示し、図4がイギリス式 *colour* の数値である。期待を裏切らず、イギリス英語では時代にかかわらず、ほぼ *colour* 一辺倒といってよい。

次にアメリカ英語に関する調査結果だが、こちらも予想通りの結果である。P4 (1750–99年) までは伝統を受け継ぐ *colour* の綴字が圧倒的だが、P5 以降は著しく衰退し、代わりに *color* が伸びていく。P5 といえば、Noah Webster が *An American Dictionary of the English Language* を出版した1828年を含む半世紀の時代区分であり、アメリカ式綴字がその後数十年の時間をかけつつ定着していった様をよく表わしている。

今回の調査では、コンテキストのなかで具体的な事例を精査することはできなかったが、Anson (36-41) によれば、近代英語期の *or/lour* の揺れについて、注目すべき言語学的・社会言語学的背景がいくつかある。例えば、16世紀のイギリス・ルネサンス期における古典語への回帰の風潮が *doubt* などの語源的綴字 (etymological spelling) を将来したということはよく知られている (cf. Hotta) が、

図3: ARCHER によるイギリス英語における *color* のジャンル別分布

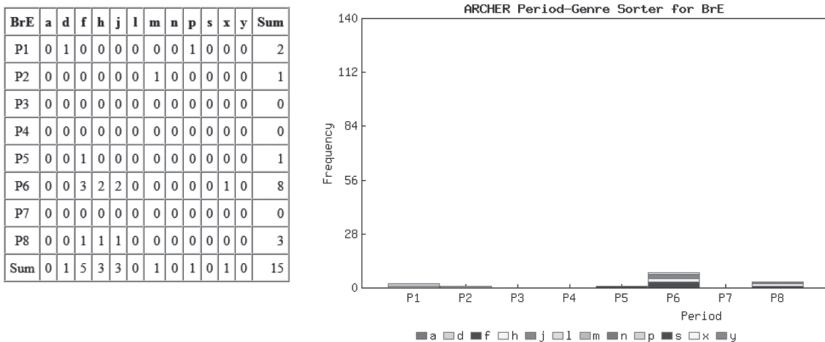




図4: ARCHER によるイギリス英語における *colour* のジャンル別分布

BrE	a	d	f	h	j	l	m	n	p	s	x	y	Sum
P1	0	3	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	6
P2	0	5	8	0	1	0	21	0	0	19	0	2	56
P3	0	1	3	0	6	1	31	0	0	25	1	1	69
P4	0	4	5	0	2	0	11	0	0	9	0	4	35
P5	18	1	7	1	2	1	1	0	0	8	0	1	40
P6	34	2	8	0	0	1	8	0	0	2	2	3	60
P7	23	1	16	0	2	0	3	0	0	0	1	1	47
P8	6	2	18	0	30	1	0	0	0	0	2	2	61
Sum	81	19	65	1	43	5	75	0	2	63	6	14	374

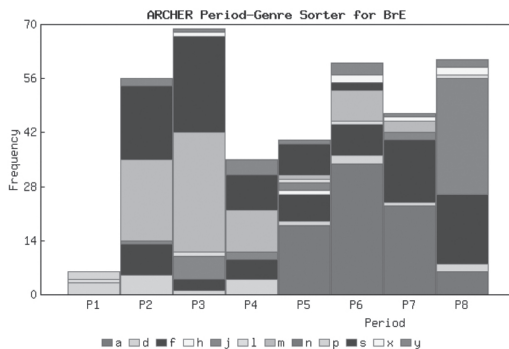


図5: ARCHER によるアメリカ英語における *color* のジャンル別分布

AmE	a	d	f	h	j	l	m	n	p	s	x	y	Sum
P1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P4	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
P5	1	0	6	0	1	2	0	0	0	5	0	1	16
P6	17	0	3	0	1	0	5	0	0	8	0	4	38
P7	64	39	17	0	8	1	0	0	0	3	2	1	135
P8	63	2	8	0	1	2	0	0	0	3	1	6	88
Sum	146	42	35	1	11	5	7	0	0	19	3	12	281

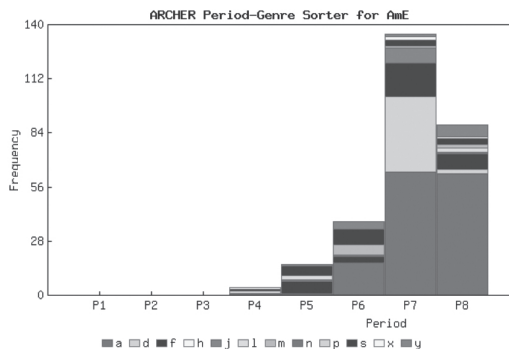
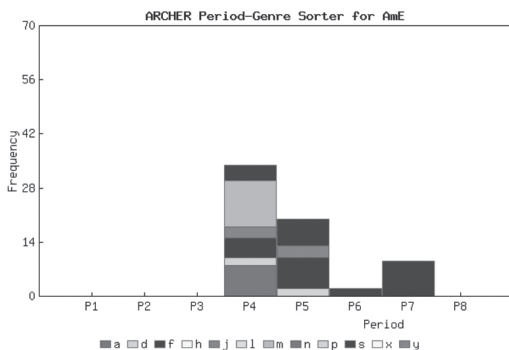


図6: ARCHER によるアメリカ英語における *colour* のジャンル別分布

AmE	a	d	f	h	j	l	m	n	p	s	x	y	Sum
P1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P4	8	2	5	0	3	0	12	0	0	4	0	0	34
P5	0	2	8	0	3	0	0	0	0	7	0	0	20
P6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
P7	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
P8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Sum	8	4	24	0	6	0	12	0	0	11	0	0	65



*or*への一時的な回帰にも関与している。また、17世紀後半の王政復古期には、語の音節構造の考慮も、綴字の好みに影響を与えたとされる。2音節語では *our* が好まれるが、3音節以上の語には *or* が好まれた等の傾向が指摘されている。

続く18世紀には合理的な綴字への関心が高まり、再び *or* 綴字への回帰が部分的に観察されたという。また、1755年の Johnson の辞書に関しては、原則として直近の語源の綴字、つまり COLOR についていえばラテン語式 *color* ではなく フランス語式 *colour* こそが重視される辞書編纂方針が、見出し語の綴字の選択に決定的に作用したとも論じられている。指摘されているこれら各時代の各要因が、実際にどれほど綴字の選択に「効き目」があったのかは、今後検証していく必要があるだろう。

## 6 後期近代英語期（イギリス英語）の分布

前節と同じ近代英語期ではあるが、とりわけその後半の時期の事情についてさらに詳しくみておきたい。後期近代英語期のイギリス英語の状況について、1710–1920年の時期をカバーする、約3,400万語からなるジャンルを整理したバランスコーパス *CLMET* を用いて調査した。調査対象は、COLORのみならず、これを語幹にもつ各種の接頭辞や接尾辞を付した語形で、BICOLOR, COLORLESS, COLORATION, DISCOLORED など様々な種類を含む。表3に、3区分した時代別の頻度数を示す。

全3期を通じて予想通りに *colour* 系が圧倒的であることは確認できるが、ライバルの *color* 系も完全に駆逐されてはおらず、なんとか持ちこたえていることが分かる。少なくとも現代と比べれば、ある程度の揺れを示していたことは間違いない。英語の米英差について、現代的な視点からみると、ともすればAかBかという二律背反の問題のように受け取られがちだが、必ずしもそうではなく、程

表3: *CLMET* による *color* と *colour* の頻度

時期区分（サブコーパスの規模）	<i>or</i>	<i>our</i>	<i>our</i> 比率
第1期：1710–1780（10,480,431語）	169	1,273	0.8828
第2期：1780–1850（11,285,587語）	321	1,650	0.8371
第3期：1850–1920（12,620,207語）	203	3,242	0.9411

度・比率の問題である場合のほうが多い。共時的にはデジタルな振る舞いを示しているようにみえるにしても、通時的にみれば確かにアナログ的に推移してきたことが分かるのである。

## 7 19世紀のアメリカ英語の分布

次に、後期近代英語の後半を構成する19世紀について、アメリカ英語側の分布をみておこう。*color/colour* 問題に限らず英語における米英差の多くの事例に当てはまることだが、これまで示してきた通り、歴史的にみれば、これらの差異は、あるタイミングで突如として生じたというよりも、時間をかけて成立し、確立してきたものである。アメリカ式とされる *color* の綴字が定着するのにも、実は19世紀中に数十年もの時間を要している。一般にアメリカ式綴字の定着は Noah Webster (1758–1843) に帰せられることが多いが、そのような見解は必ずしも実証的な調査に裏付けられたものではない。

ここで、アメリカ英語における *color, humor, valor, honor* などの *or* 綴字の発展と定着の歴史を実証的に調査した Anson の研究結果を紹介したい。特に注目に値するのは、1740–1840年にアメリカ北東部で発行された新聞からのランダムサンプルを用いた調査の結果である。それによると、イギリス式 *our* に対するアメリカ式 *or* の定着は、単純に Webster の功績とは言い切れない。Anson (47) による調査報告のまとめの部分を引用しよう。

Most obvious is the appearance of both *-or* and *-our* through the century, but gradual change can be detected from the *-our* extreme in 1740 to the *-or* extreme in 1840. Only small and sporadic change occurred around the time of Webster's strongest influence, which suggests that if he did contribute to the dropping of *-u*, his contribution was slow to take effect.

A key year appears to be 1830 — after the appearance of Worcester's dictionary and the public attention, during the previous decade, to Webster's and Worcester's battle of dictionaries and spellers. . . .

On the whole, then, the American usage chart shows a slow but steady movement toward the *-or* spelling. No doubt the movement spilled at

least into the first quarter of the twentieth century, when sporadic cases of *-our* were still to be seen. Aided by later dictionaries, which have looked to usage or other American authorities, the shift to *-or* is now virtually complete.

Anson の見解によれば, Webster (および彼に続いた辞書編纂者 Worcester) の当該語の綴字への影響は1830年以降に少し感じられはするが, 決定的な影響というほどではなかった。さらに, *our* から *or* へのシフトの「完了」に注目するのであれば, その時期は彼ら以降, 優に数十年も待たなければならなかったのである。Webster (たち) の役割は, せいぜいシフトの触媒としての役割にとどまっていたといえそうである。<sup>3</sup>

## 8 英語の米英差のとらえ方——結論に代えて

本稿では, 現代の綴字の米英差の1例として *color/colour* を取り上げ, その歴史について, 歴史辞書や歴史コーパスを援用しつつ概観してきた。本稿にて各論点が必ずしも実証されるには至っていないものの, 先行研究からの示唆も加味しながら要約すれば次のようにまとめられるだろう。

1. COLOR の語源はラテン語 *colorem* であり, ラテン語正書法においては *or* を含む綴字が原則だった。
2. ラテン語 *colorem* から発展した古フランス語形において *or* と *our* の揺れが生じた。
3. 英語はこの語を古フランス語から 1300 年頃に借用したが, 最初期の例においてすでに *or*, *our* を含めた綴字の揺れが観察される。
4. 中英語期を通じて, 古フランス語と同様にこの語の強勢は主として第 2 音節に落ちていたため, その強さと長さを視覚的に表現すべく *our* の綴字が優勢だった。しかし, *or* も存在感を保ち, 引き続き異綴字として行なわれ続けた。
5. 16 世紀になると, ルネサンス期を特徴づける古典語への回帰の風潮, いわゆる語源的綴字の慣習が知識人の間にみられるようになり, 若干 *or* が勢力を盛り返した。こうして *or* と *our* の競合が再び生じたが, いずれかを規範

- 的な綴字として採用しようとする標準化の動きは鈍く、時間が過ぎ去った。
- 17世紀後半の王政復古期には、2音節語において *our* が、それよりも長い語において *or* が好まれる緩い傾向が生じたとされる。
  7. 理性の世紀である18世紀には、合理的な綴字として再び *or* に焦点が当てられるようになった。
  8. 一方、1755年に辞書を世に出した Johnson は、直近の語源の綴字を重視する姿勢から、フランス語的な *our* を支持することになり、後のイギリス式綴字の方向性を決定づけた。
  9. アメリカ英語における *or* の定着については、1830年代以降 Webster (および Worcester) の影響が一定程度認められるが、当時までにすでに *or* への傾斜が醸成されていたところへ、彼らが触媒として作用した可能性が高い。

重要な点は、中英語期に当該語が借用されてきた当初以来、*or* 対 *our* の競合は、後者優勢の時代が長かったとはいえ、小刻みにシーソーのような運動を繰り返してきたことである。*or* を支持する原理としては、イギリス英語においてはルネサンス期のラテン語回帰や18世紀の合理性重視の思想が関与したと疑われるし、19世紀前半のアメリカ英語においては Webster の触媒としての役割があった。一方、*our* を支持する原理としては、中英語期のフランス語式への恭順もあったし、18世紀半ばの Johnson のフランス語形を重視する語源観もあった。

英語史の各段階における音韻的、正書法的、および社会言語学的な事情や条件が情報として複雑に織り込まれ、その結果として表出してきた一つひとつの綴字が *color* であり *colour* であった。現代英語を共時的に眺める視点からすれば、*color* は典型的なアメリカ式綴字で *colour* は典型的なイギリス式綴字と認識されるにとどまるだろう。しかし、この綴字の変異が英語の米英対立の象徴となったのは長く見積もって200年ほどに過ぎない。それ以前には、その対立は——「対立」というよりは中立的に「揺れ」と呼んでおくのがよさそうだが——各時代の所与の歴史言語学的条件に敏感に反応した綴字の実現にほかならなかつたのである。COLOR の綴字に関する限り、英語史の観点からみれば、アメリカ英語の淵源は、200年前でも（そして Jamestown 建設の400年ほど前でもなく）、少なくとも700年を遡ったところに認めたいと思う次第である。

## 註

- 1 本稿は、大西洋と太平洋を横断する巨視的な視座からアメリカ文学・文化を研究し続けておられる巽孝之先生に敬意を表し、歴史的俯瞰のもとにイギリス英語に対するアメリカ英語の言語的特徴を体現する1項目について記述する小さな試みである。
- 2 近代英語期とは通常1500–1900年の時期をさすが、*ARCHER* は1600–1999年の範囲をカバーするコーパスであり、1世紀分後ろ倒しになっている。ここでは、後者の年代をやや緩く「近代英語期」と解釈しておく。
- 3 この事例研究から、Anson (48) は言語変化の標準化と規範化の関係に関する次の一般論も導き出そうとしている。

... usage and authority work mutually and each tends to influence the other and be influenced by it. A highly respected dictionary may influence the way an educated public spells debated words; on the other hand, no authority — even Webster — can hope to change a firmly entrenched spelling habit among the general public. The chances are good that, had the public not been moving steadily toward *-or* forms, we might still be spelling in favor of *-our*, despite Webster. While Webster may have served as a catalyst for some spelling changes, he was not, for spelling reform, the cause celebre many have assumed. Most of his reforms never caught on. Curiously, spelling reform on a large scale, like Esperanto and other synthetic languages, has never appealed to the public as have changes introduced organically and from within. Proponents of spelling reform argue quite convincingly that their proposals meet a real public need for simplicity, precision, and uniformity; yet often the public allows linguistic changes that work in just the opposite direction. Usage, then, is a highly resistant strain when it comes to ‘curing the ills’ of the language, and it ultimately determines its own future.

## 参考文献

[辞書・コーパス]

- *ARCHER = A Representative Corpus of Historical English Registers 3.2* 1990–2013. University of Manchester.
- *BNCweb* = Hoffmann, Sebastian and Stefan Evert (eds.) 1996–2008 *BNCweb CQP-edition* (Available online at <http://bncweb.lancs.ac.uk/>).
- *CLMET* = De Smet, Hendrik, Hans-Jürgen Diller and Jukka Tyrkkö (eds.) 2013 *The Corpus of Late Modern English Texts, Version 3.0*. Leuven: Department of Linguistics, University of Leuven.
- *COCA* = Davies, Mark (comp.) *The Corpus of Contemporary American English*. 2008–. (Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>).

- *COHA* = Davies, Mark (comp.) *The Corpus of Historical American English*. 2010–. (Available online at <https://www.english-corpora.org/coha/>).
- *GloWbE* = *Corpus of Global Web-Based English*. (Available online at <https://www.english-corpora.org/glowbe/>).
- *LAEME* = Laing, Margaret and Roger Lass. *A Linguistic Atlas of Early Middle English, 1150–1325*. University of Edinburgh, 2007. (Available online at <http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/laeme2/laeme2.html>).
- *MED* = Kurath, H., S. M. Kuhn, and J. Reidy (eds.) 1962–2001 *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: University of Michigan Press (Available online at <http://quod.lib.umich.edu/m/med/>).
- *OED* = Simpson, J. A. and E. Weiner (eds.) 1989 *The Oxford English Dictionary* (2nd ed.) Oxford: Oxford University Press (Available online as *The Oxford English Dictionary Online* at <http://public.oed.com/>).

[二次文献]

- Anson, Chris M. “*Errours and Endeavors*: A Case Study in American Orthography.” *International Journal of Lexicography* 3 (1990): 35–63.
- Hotta, Ryuichi. “Etymological Respellings on the Eve of Spelling Standardisation.” *Studies in Medieval English Language and Literature* 30 (2015): 41–58.